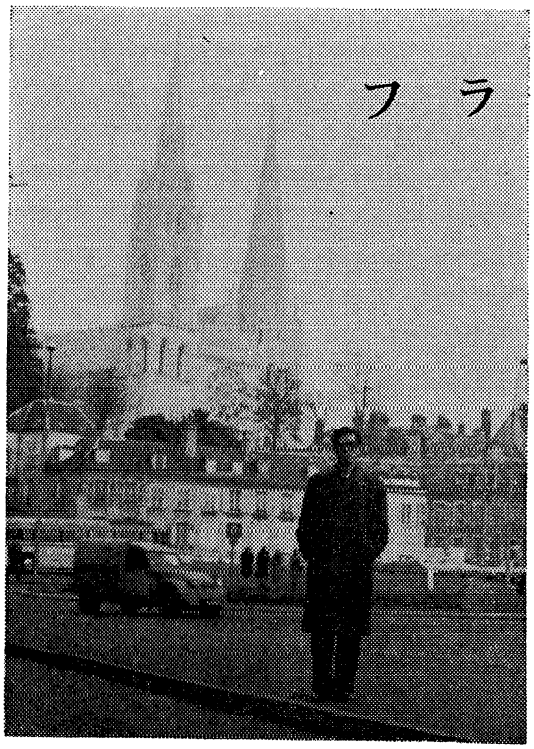


フランス滞在記

桜井良文

(写真説明　シャルトルにて筆者)

夏のパリにはパリジャンはいない．

そのパリジャンがそろそろ避暑地からパリに帰ってくる9月のはじめ，私は再びぶらりとル・ブルジエの空港へ降りたった．それより半年前，すなわち1963年4月にパリを訪れたときにくらべると気分的には大へん楽しく，フランス語を習う暇もなかった日本での2ケ月半の生活に対する後悔と，これからの半年間のパリ生活に対する若干の不安はあったが，心はうきうきしていた．こんど日本をとび出したときには，スイスでの国際自動制御連合講演会とオランダでの国際原子力機関のシンポジウムとで頭が一ぱいで，フランスでの半年間の生活にまで考えがまわらず，アムステルダムで自分の講演がすんでから，パリへ行ったらどこのホテルに泊るのか，どこへ顔を出したら自分の生活がきまるのかを心配しだしたくらいで，パリについても「やれやれ，やっと着いた」というくらいの気持であった．しかし，それからの半年間は私に新しいいろいろな経験と知識を与えてくれた．

1. フランスという国

元来私はフランスという国にそれほど興味をもっていたわけではなかった．高等学校時代も理工でドイツ語を主とした関係でドイツには相当の関心をもっていたが，お隣りであるフランスには殆んど関心がなく，したがってどちらかといえばドイツの敵対している国という位にしか思っていなかった．これは私が自然科学のうちでも電気工学という学問を専攻にしたためもあろう．美学や数学を専攻にすれば，もちろん違った見方をもっていたろう．その私がひょんなことから何の用意もなしにパリにきてしまったということに私の違算があったと思う．しかし，それだけにまたフランスの半年は私には興味あることの連続であった．

そもそも，フランスの工学の現状とはどんなものなのか．これについても私は何もしらなかった．フランスがかって偉大な自然科学者を生みだしていることと．現在原子力に非常に力を入れているということだけが私のしっていることで，それのよってきたる原因は何なのか．またアメリカとの関係は？など現地での生活で身をもって知らされるまで，あまりしろうともしなかった．

現在のフランスの原子力をレベル・アップさせる原動力は何かということに思いおよぶと現在の世界状勢とドゴール仏大統領とのことにふれなければならない．フランス人の今の考え方に大きく影響しているのがドゴールのいわゆる“フランスの栄光”である．西洋史をひもとくまでもなくフランスは11世紀以来のヨーロッパにおける大国であり，ナポレオンが残した足跡は偉大で，その芸術（美術）に関するレベルはいまでも世界一であろう．しかし過去の二回の世界大戦におけるフランスの働きをみるとき，ドイツに圧倒され，アメリカ，イギリスの助けでだきおこされたという感じがする．このへんに大フランスの斜陽感というものが誰の目にも明らかで，フランス人自身が何とかしてこの傾きかけた母国に再びかっての繁栄をもたらそうと努力する遠因がある．さらに，フランスには「アンティ・アングロサクソン」の考えがある．私が1ケ月半下宿していたブザンソンの老夫婦はテレビにアメリカ軍が出てくるたびにいやな顔をして「アメリカ軍が早く，ヨーロッパから引き揚げるべきだ」と何度も繰返していたし，CEN-Cadarache で私の案内兼通訳をしてくれた婦人も昼食の席で私と二人だけになったとき「今日はアメリカ人の見学者がご一緒で，大変いやな思いだったでしょう」と，アメリカ嫌いの感情をかくそうとしなかった．彼らにはアメリカに対する妬み，すなわち自分達の国で食いつめたような者がアメリカに渡って成金に成り上ったというような感情と，最近はアメリカに経済的にも政治的にもおさえられていて

しゃくにさわるという感じとがあって，何とかしなくてはと思っているに違いない．イギリスに対しても同様で例のＥＥＣ（欧州経済機構）へのイギリスの参加拒否などに見られるように「ヨーロッパは大陸内のヨーロッパの国々の共同体としてやってゆくのだ」というのがドゴールの考え方である．もっとうがった考え方をすると第２次大戦后のイギリスの植民地政策とフランスのそれとの相違なども英仏間のわだかまりの一因らしい．イギリスは，インドはじめ植民地の独立を上手にやってのけたが，これと反対にフランスの植民地独立には尨大な犠牲が払われている．アルジェリア問題にしろ，現在のベトナム問題にしろ，フランスの蒙った被害は予想外に大きい．ベトナム問題などではアメリカが中に入って良い顔をしようとするのでなおさら腹にすえかねるのである．このようなアンティ・アングロサクソンとフランスの斜陽化を防いで繁栄への道を開こうとするのがドゴールの現在の考え方で，そのあらわれが昨年の中共の承認であり，原子力の強化であるのである．前者はベトナム問題の解決への布石なのであり，後者は東西二大国の間へフランスが割り込むための手段なのである．このような見解に立つとき，フランス政府が原子力に尨大な予算をつぎこんで，核爆発にもってゆく力の入れ方も理解できるし，またそれに関連して原子力プラントを日本にうりこむため，親日親日といって日本に接近するやり方もわかるのである．

2．フランス語と食べもの

このようにかくと，フランス人というのは何と政略的なやつなんだろうと思いこむ方々があるかもしれない．それは違う．彼等は一般的にいって大へんお人良しであり，陽気な面もある人々なのである．パリに住む人々は一寸別で，日本でもよくある“都会人”であるから人に対しては甚だ冷淡なようであるが，地方に出てみると仲々世話もよくやいてくれるし，明るい感じがする．ただ新しくなるまでには少し時間がかかるだけである．私の困ったのはフランス語の会話で，はじめにも書いたように，ＡＢＣ（アー・ベー・セー）もしらずにフランスへ行ったもんだから，はじめのうちは大へん苦労をした．最初の６週間は朝から夕方まで会話を習ったのであるが先生が英語をしらず，こっちはフランス語をしらずでは意志が疎通しない．フランス人は他国語をしゃべりたがらぬとはきいていたものの会話の先生までが英語をしらないのには弱った．外国生活をして日本人が最も困るのは言語だといわれるが，腹が立っても外国語で怒るわけにはゆかないので，これには閉口である．時々フランスの原子力委員会に交渉に出掛けることがあったが，はじめは先方もこちらにあわして英語をしゃべってくれるけれども，話が面倒になると，フランス語にしてくれという．フランス語になるとこちらの思うことが充分に表現できないから交渉が不利になるので，こちらは英語でやってくれという．しまいには「貴方はフランス語を習ったではないか」というから，こっちもまけずに「たった６週間だけだ」とやりかえして，けんか腰になってしまう．向うのつもりではフランス政府の金でフランス語を教えてやったのにということかもしれない．事実，フランス政府は外国人にフランス語を教えるのには相当の予算と人間をさいているのだから．

しかし，少しフランス語が話せるとパリは良い都会になる．生活費も言葉の通じるか通じないかによってぐっと違ってくる．たとえば，最初私が滞在したホテル Royal Alma は一泊 50ＮＦ（新フラン）で，夕食をホテルでとるとプラス 25ＮＦだから，それだけで 75ＮＦもかかったが，10月以降滞在したモンパルナスのホテルは一泊 10ＮＦであった．前者はフランス語をしらなくても泊れるので，日本人客も沢山いたが，後者のような安ホテルでは英語は通ぜず，専らフランス語で交渉することとなる．外国旅行から帰った人が「パリは物価が高い」と口をそろえていう．それは嘘ではないが，パリには旅行者用の顔と滞在者用の顔とがあることを忘れてはならない．エトワール（凱旋門）を中心としたシャンゼリゼ近くのホテルは大体旅行者向（観光客用）きだと考えて差支えない．ちなみに「タイムス」の記事によると世界で物価の最も高いのは日本の東京ということになっている．これは東京が観光客用の顔として大へん見事なものをもっているということになるのであろう．パリの物価はニューヨークの 10％高いというのが「タイムス」の評価であるがこの数字は大体妥当のように思う．

物価の話のついでにフランスでの安いものについてふれてみよう．先ずブドウ酒．御存知のように，フランスは世界一のアルコール消費国でありフランス人はガブガブとブドウ酒を飲む．このブドウ酒は水よりも安く……というのはヨーロッパは水が悪いので，飲料用の水として「ユヴィアン」など瓶詰のものが売り出されているが，これはブドー酒より高い……人々は瓶を持参してマーケットに行き，ブドウ酒をつめてもらう．小形の一升瓶で（日本円に換算して）50円位という安さである．それで昼食時にも一人一本のブドウ酒（これは小ビン）をのむのが普通で，われわれが昼食時にアルコールをのまないと不思議な顔をする．「顔が赤くなるし，午後ねむくなるから」といいわけをいうと「それなら食後にコーヒをのむとよい」とすましていう．なるほどフランスの

写真（左上）エッフェル塔とアレクサンドル三世橋の前で（左下）オペラ座付近で

写真（右上）ランブーの大邸宅（シャトー）（右下）ロダン美術館

コーヒは濃くて眠気さましには適しているのだが，われわれの口には一寸きつすぎる．まあゲンノショウコに近い味で，お義理にもはじめはうまいとは思えない．しかし馴れるとこれがだんだんとおいしくなるから人間の味覚とは不思議なものだ．私の経験では例のキャマンベールと称する軟いチーズにしても，フランスに着いた当座は不味いと思ってたべたものだが，馴れるにしたがって次第に美味しくなり，最後のころには日本でたべるお漬もののように，なくてはならぬものになってしまった．このキャマンベールも安い食物の一つであるが，日が長くもたぬので沢山もってかえるわけにもゆかず，帰る飛行機では2つだけカバンの中にひそめてもって帰った．七里名誉教授には渡欧前に頼まれていたので，帰阪早々にお届けしたが，馴れると味が忘れられぬ人々も多いことと思う．

ブドウ酒と共に忘れられぬのがコニャック，イギリスなどでいうブランデーである．ナポレオンなどで高いアルコールの代表のように思われているが，フランスではそう高いものではない．フランス人はウイスキーは身体に毒，コニャックは胃に薬という．なるほど飲んだ翌日もたれない点ではウイスキーより健康的のように思われるが，足をとられるのが難．一説にはフランスの植民地政策の失敗はコニャックのせいだ．イギリスのウイスキーのように身体の毒でなかったのがたたったのだという意見もあるが，どんなものだろうか．（これは説明の必要があるかもしれないが——）

安いものといえば，日常彼等が食べるバゲットと称する長いパン，これはフランス映画などでよく若者達が手に持って歩いているのを見かけると思うが，しごく安くてなれれば結こううまいたべものである．チーズをつけて食べるのがうまいのだが，レストランなどではいくら食べても代金はとられない．大学の食堂などになると，学生がポケットにつめこんで持って帰る光景が見られるが，学生気質はどこの国でも同じようなものだ．最初のうち颯爽としたパリ美人が裸のバゲットを手に持って街を歩くのが大へん奇妙に見えたものだが，なれてしまえばかじりながら歩いているのを見ても何ということはない．同じパンでも朝食にコーヒーと一しょにとるクロワ

ッサンはバターがたっぷりはいっておかしに近いような感じだが，これは少し高い．三日月形（フランス語で三日月をクロワッサンというのだが）のこのパンは，フランスがトルコ軍をうち破った時，トルコを食うというのでその国旗の形からつくられたといわれるが，日本のそこらのホテルで出る同じ形のものに比べて，ずっとおいしい．フランス人は朝メシを簡単にすます習慣をもつので普通はコーヒーだけかせいぜいパンを1つか2つ食べるだけである．

果物では何といってもオレンジ．シーズンによっても違うが，日本でたべるみかん類よりずっとおいしくて値段も安い．しかしシーズン・オフのりんごなどは日本のものに比べると質も悪く，大きさも小さいので，りんご畑からひろってきたのではないかと思うようなのを店頭においてあるのを見かけた．もう1つ安いくだものにぶどうがある．これはあまりにも有名であるからここでは述べないが，日本のぶどうよりうまいとは限らないということだけつけ加えておこう．

3. フランスの教育制度

やわらかい話ばかり続いたので，すこしまじめな話にもどろう．フランスで私が興味を持ったものの一つに教育制度がある．フランスの教育で日本の人々にも知られているのは，日本でソルボンヌ大学と呼ばれている「パリ大学」とノルマリアンとかポリテクニシアンの称号でおなじみのグラン・エコールとであるが，この二つは教育制度の二本の柱といってよいであろう．歴史的に云えば大学（ユニベルシテ）制度はずっと昔の僧侶による教育の時代から続いているのだが，フランス革命によって一時中断され，代りに民衆のための大学としてエコールが作られた．ナポレオン1世は教育体制を統一してピラミッド形にしたが，その際一度全廃になった旧大学の学部（文，理，法，医，薬，神学部）を復活させ，これに学位の授与権を与えたので，この二つの制度は平行して存在し現在にいたっている．ユニベルシテはバカローレアと称する大学入学資格検定試験にパスすれば入学できるのに対し，グラン・エコール（日本ではしばしば高等師範学校と誤訳されている）は，日本の大学等よりも激しい競争試験の末にはじめて入れるので，非常に難関とされており，卒業人数も 20～30 名程度にすぎない．これらの卒業生は前述の肩書き（ノルマリアンとかポリテクニシアン）を名誉とし，名刺にもすりこむほどであるが，強い学閥を形成していて，官僚の行政面の主要なポストは彼等によって独占されているといってもよいであろう．高等学校以下の制度も前述の大学制度と同様はっきり二分されている．民主的なユニベルシテ制度と保守的なエコール制度が共存しているフランスの教育制度は何となくフランスの国自身を表現しているように思うのは私の思いすごしであろうか．

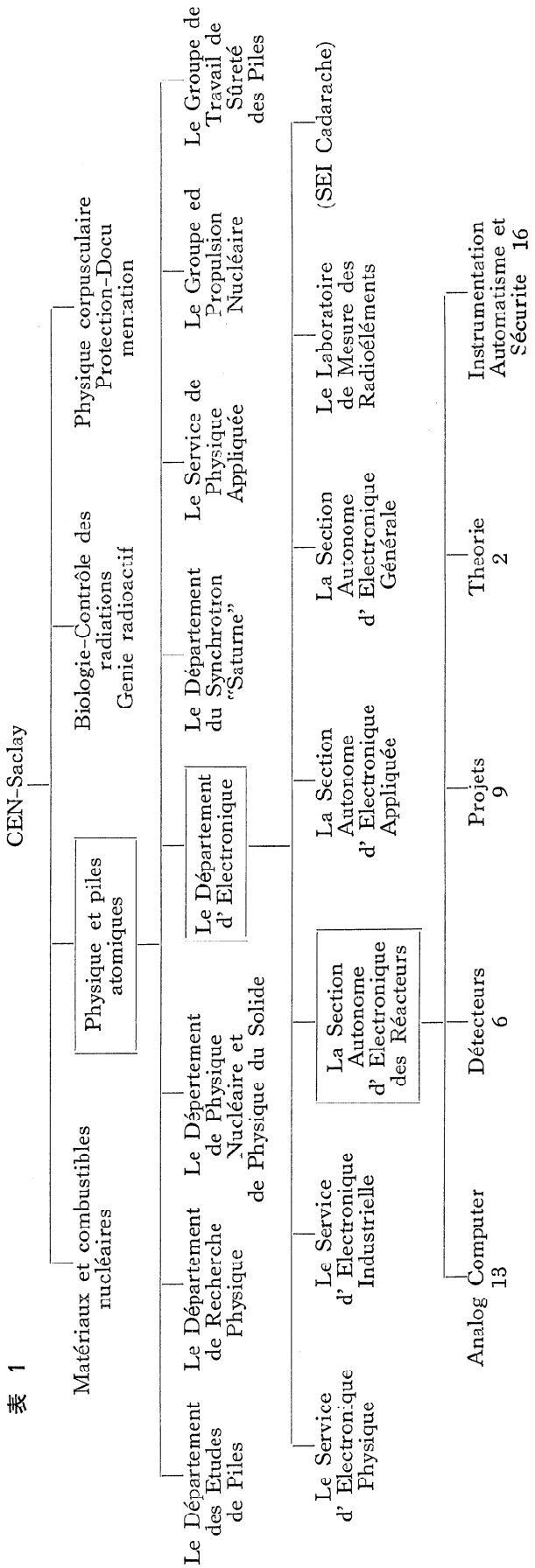
フランスの大学には工学部というものは存在しない．大学にあるのは自然科学の学部であって日本で云えば理工学部とでもいうのであろうが，その内部における電気工学科とか機械工学科とか云う区分もはっきりしていない．名前だけで見ると鉱山大学とか，船舶大学とか，大変専門化されているようにみえるが，内容は看板とちがっていろいろの部門を持っている．これはナポレオン時代の名前がそのまま残っているからで工学の細分化は日本のようではない．そのかわり，最近の日本でさけばれている基礎科目の強化という点ではなかなかゆきとどいており，いい点もある．フランスにいてその工業が思ったほど成長していないという感じを受けたが，この工業化の弱点が教育制度の為かどうか確かめることができなかった．教育制度ではないがそれ以前の家庭教育もわれわれには興味があった．日本人は子供に社会道徳を教えこむことがへただといわれるが，子供に対するしつけのきびしさはフランスも他の西欧諸国と同じで，われわれには子供に同情したくなるような場面もしばしば見受けられた．テレビにしても国の放送が1チャンネルだけであるが，夜の8時半頃になると子供のお休み番組がでてきて「子供達よねなさい」という文字が画面に現われ，子供達がベッドにはいる時間だけそのまま画面が停止する．その後大人向きの劇映画などがはじまるわけであるが，これなど日本でも見ならったらいいと思われる．

4. フランスの原子力

次に私の専門である原子力の分野での話に入ろう．はじめに述べたように，ドゴールは原子力研究に莫大な金をつぎこみ，これを持って世界政治の舞台に上ろうとけんめいであるので，フランスにおける原子力研究は大変金のかかったものになっている．ウラン鉱山やプルトニウム工場等については見学しなかったので，くわしくは述べられないが，原子炉をもつ国立研究所及びフランス電力会社の持つ原子力発電所を見学したので，以下にそのもようを述べて見よう．

最初，フランス政府はパリ郊外に二つの原子力研究所すなわち Fontenay-aux-Roses と Saclay とを作ったが，やがてこれを拡張する必要にせまられ Grenoble と Cadarache に新らしい設備を作るようになった．全体の中心は私が半年滞在した Saclay の研究所で 9,000 人の所員（外来者も含む）を有し，原子力のあらゆる部門

表 1



の研究を網羅している．主な装置はＥＬ3（17.5ＭＶ）を含む3つの原子炉，5つの臨界実験装置，"Saturne"（3 GeV，プロトン・シンクロトロン）をはじめとする9台の粒子加速器などで，燃料，材料，生物，医学等に関する放射線応用にいたるあらゆる研究が行なわれているが，プルトニウム製造関係は Fontenay-aux-Roses 研究所へ，エレクトロニックス関係は Grenoble 研究所へ新らしい原子炉の開発，建設は Cadarache へ疎開させつつある．

1つの研究所で9,000人もの人員を収容しているのは世界にもあまりないと思われるが，通勤や食事の問題がしんこくである．朝夕の通勤時には100台の通勤用バスと，数千台に及ぶ自家用車がその門を出入し，しかも門の通行には写真入りの許可書を見せなくてはならないので，その混雑状況たるや，ちょっとしたみものである．昼食は15分毎に時間を切って二ケ所の大食堂で取るのであるが，それでも延々長蛇の列をなし，気の短かい日本人は馴れるまでいらいらさせられる．

研究所の勤務時間は午時8時30分から午後6時までであるが，土曜日と日曜日は休みであるから勤務時間としてはわが国とそう違わない．しかし原子力研究所へ勤務している人々の給料は，一般に比べて高いといわれている．厚生施設，その他も整っていて旅行や観劇の世話まで所内でしてくれる．一般職員は，一度門をくぐると特別の許可書がない限り外出ができないが，エンジニア以上になると週に2～3回は外部への出張という形で，ちこく等が認められているし，身分証明証を見せれば，自由に外出もできる．この研究所のもう一つの特長は，パリ大学との協力たいせいの良いことで，所員は大学の講義を聞く機会を与えられ，大学院の学生は研究所にきて一年間の実習を行なっている．さらに原子炉研修所も付置されているが，学生は世界各国から集まっており，教授の顔ぶれもパリの名大学の著名な教授連中である．この研修所にある原子炉 "Ulysse" はちょっとした実験に便利なので，研究所の連中が実験につかっている．表1は Saclay 研究所の機構を示しているが，人員構成の上からは物理部門の関係が多いようである．この研究所は外国からおとずれる人々に対するＰＲも兼ねているので見学者コースとしてＥＬ3，Saturne，タンデムバンデ等が選ばれている．

次に Grenoble の研究所は Saclay ほどは大きくないが，7つの加速器と2つの原子炉を持ち特殊の分野における研究に力を入れている．たとえば前述のエレクトロニクスについていえば速い現象（Fast Electronics）とか，回路の半導体化に力を入れ，この面では世界の第一線を行っているし，強磁性体の照射効果については有名

な Néel 教授のもとで強力な研究体勢がしかれ，優れた研究成果が得られている．

Cadarache 研究所はマルセイユの北方約 80 km の辺ぴなところに建設中の新らしい開発センターで1,600 ha の敷地を持ち，新らしい原子炉をぞくぞくと設置している．もっとも有名なのは高速中性子炉 Rapsodie (20 MW, 2×10^{15} n/cm^2/S) で Euratom との共同で作っており完成は1964年と予定されている．今年の2月に見た時には建屋は完成していたが，炉本体はまだおさまっておらず，実験としてはもっぱら Na 冷却系統の実物大模型について応力測定等を行なっていた．この他暴走用原子炉 Cabri がようやく臨界に達し，また潜水艦用原子炉の建設も行なわれている．7つの原子炉のうちで最も活躍していたのは燃料テスト用の Pégase で，その他私の興味をひいたのは高温用原子炉 César であった．この研究所は最も近い都会まで 25～35 km であるためわれわれの宿舎は古い館 (Chateau) の一室であり，なかなか風雅な生活をさせてもらった．最後に Chinon の原子力発電所を見に行った．ここは西フランスのツールに近い所にあり，ロアール川の水を冷却水として使っている．第1号炉（ＥＤＦ—１，電気出力 60 MW）は運転中で，第2号炉，第3号炉は現在建設中．ここは計算機制御で有名であるが，なるほど莫大な計算機を制御室に収容していた．

5. パリ観光

「パリは花の都」といわれるが，外人客にとって，もっとも見ごたえのある都会はパリであろう．元来私は出歩くのが好きなたちで，土曜日，日曜日には必ずといってよいほど外を見物にでかけたが，半年たってみてもやっと日本交通公社編「外国旅行案内」にのっている名所をまわったぐらいで，見物したい多くの所を残こしたまま，後髪をひかれるおもいで帰国してしまった．しかし日本へ帰ってなつかしく思い出すのは，エッフェル塔や凱旋門等のいわゆる名所ではなくて，わびしい裏街の一角とか，メトロの一隅，または街路を眺めるキャフェのボックス等である．劇場にしても，コメディ・フランセーズやオデオンの平土間の席で見たオペラより天井さじきの一角からへっぴり腰で見おろした舞台の方がなぜか心に浮かんでくるのは私だけの感傷であろうか．

夏のパリにはパリジャンはいない．

夏は劇場も皆休みであるが，パリでシーズンといわれる冬の間じゅう人々は劇場へ集まる．日本におけるよりもずっと安い料金でいい出し物が見られるのは，パリの観劇人口が多いせいであるといわれるが，なるほどいつもどの劇場も満員でしかも見ごたえのある内容をほこっている．オペラ座の「白鳥の湖」の優雅な振付け，テアトル・ド・シャンゼリゼ「シンデレラ姫」のモダンな舞台装置も，われわれの目には大へんめずらしく思われたが，下町趣味の寄席の風景もわすれられない一コマである．シャンペンを飲みながら次々に出てくるかわった出し物に興じるのは日本と同じである．ギター片手に，社会風刺の歌をうたう芸人は日本でいえば，さしずめ柳家三亀松とでもいうところであろうか．はじめの方はわかりやすいフランス語であるのに，オチのところでフランス人がどっと笑ってもとたんにわからなくなるのは外国人の悲しさである．

日本人がよく行くのは，シャンゼリゼの「リド」とモンマルトルの「ムーラン・ルージュ」ということになっているが，この辺はいわゆる観光客向きの見せ物で，アメリカ人についで日本人の数が多い．同じ観光客向きでもシャンソニア（音楽酒場）は，芸人とお客さんが密接している点で外国情緒が満ちており，おそえものとして有名な貞操帯まで見せるようになっている．このシャンソニアの1つには昔の牢獄がついていて，セーヌ川の水面があがると牢の中にも水が入ってくるような悲惨な歴史を物語る場所もある．しかし同じ地下室でも Cave, "Tour Effel" のようなすばらしい地下室もあって，国際学会のレセプセションではここを使ってカクテル・パーティを開催していたが，外国の人々に非常に喜ばれていた．カタコンブとよばれる長さ 2 km に及ぶ地下道は両側にギッシリしゃれこうべを積んだ壁が続いてわれわれをおどろかす．あまり気味のいいものではないが，一見に値することは確かである．

パリ観光で最もすばらしいのは美術館めぐりである．最近，日本にきたミロのヴィーナスや，ピカソの絵などは，パリで見ればそうめずらしいものでもない．有名なルーブル博物館は，1日や2日で見れるものではないがわれわれ素人がいくと，最初うんざりする方がさきにきて美術の観賞どころではないというのが本音であろう．われわれが見てすなおに感心できるのは，ルーブル博物館の別館（ジュ・ド・ポム）である．いわゆる印象派の画家，ルノワール，セザンヌ，マネ，モネ，シスレー等の代表的な作品が見るものにわかりやすいような配置に並べてあり，数もそう多くないので半日ぐらいの観光にはもってこいの場所である．もう1つの有名な美術館，近代美術館はピカソや日本の藤田画伯の絵があるので，だれでも行くのであるが，ああいう新らしい絵は私には苦手である．中学生か高校生の団体に説明しているのを横から聞いているとなかなかおもしろい理屈らしいが，フランス語が半分もわからないので，肝心なところはわ

からずじまいである．このような美術館の紹介をしていてはきりがないが，最後にロダン博物館について少しふれておこう．ロダンの彫刻については以前にもある程度みたりきいたりはしていたが，この博物館で見た作品から私のロダンに対する見方は相当変ったといってよいだろう．人間の動きに関する大胆なせまり方がここの作品にはよくあらわれており，アメリカのフィラデルフィアで見たロダン博物館の作品とは，全く異なった印象を受けとった．

日本人のパリ観光に忘れられないのに，日本料理屋と香水店がある．パリには現在4軒の日本料理屋があるがいずれも結こう繁じようしていて，ヨーロッパ各地からパリを訪れる日本人の味覚を楽しませ，また一部のフランス人にめずらしがられている．われわれも時々やっかいになったが，すき焼とか，てんぷら，とうふのみそ汁などは故国の味覚として忘れられないものであったし，フランス料理の油濃さにたんのうしたわれわれの舌には夏の涼風を思い出させるような役目を果たしていた．

パリの目ぬき通りの香水店には，軒なみに日本語の看板が出ている．「日本人の店員います」と書いてある．それほど日本人はパリで香水をよく買う国民である．だいたいフランスの女性は，月に1度ぐらいしか風呂にはいらないから，体臭も強く，従って香水をつかわなければカムフラージュできない．また香水と体臭とミックスしてある程度の効果を上げ得るのである．毎日お風呂にはいってきれいにしている日本の女性に果してあの外国人と同じ香水が必要なのであろうか．日本へ帰って，電車の中などで，ただようフランス香水のにおいをかぐたびに不思議な気がするのは，私だけであろうか．女性の話が出たついでに，フランス美人の話にもふれなくてはなるまい．私どもがフランスの女性に美人を感じるのはフランスの女性が，アメリカのように大きくないことによるようである．メトロに乗ってもだいたいの婦人はわれわれが見おろせる背の高さである．アメリカで感じる女性の威圧感はフランスでは感じられない．一般にいって日本の女性は年をとっても若くみえるが，外国の女性は25～26才をすぎると急激にふけこむ．それでわれわれは外国の中年婦人の年令をしばしばまちがうことになる．ミロのヴィーナスの年令について日本人の間でしばしば議論をかもすのは，このようなちがいにもよるのであろう．フランスでは，未婚婦人をマドモアゼル，既婚婦人をマダムとよばねばならないが，この習慣はしばしば私達を苦しめる．Saclayの研究所の秘書室の女性をかわいらしいので，マドモアゼルでよんでいたら，実はマダムであって，プレゼントしなくてよかったと思ったり外務省の係の女性をマダムとよんだら，先方にマドモアゼルとなおされてあわてたのは一人私だけではないようだ．かわいらしいマダムとこわいらしいマドモアゼル．これはなにもフランスだけではないようである．

〔註〕紙面の都合でスペイン，ポルトガル紀行については，今回はかつあいした．

（大阪大学工学部原子力工学科教授）